



平成二十五年年度文化庁文化芸術振興費補助金  
(トップレベルの舞台芸術創造事業)

平成二十六年

# 二月 自主公演能

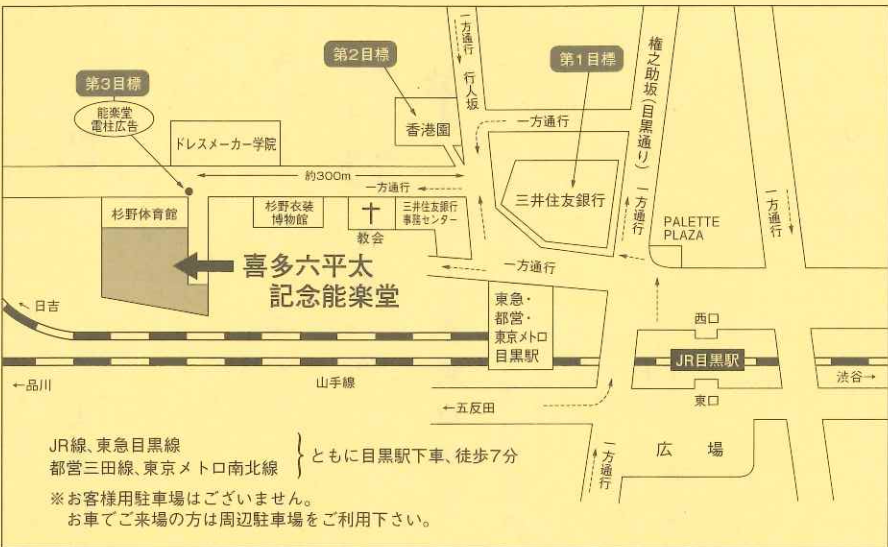
とき 平成二十六年二月二十三日(日)正午始

〈整理券配布・十時三十分、

見所入場・十一時、解説・十一時十五分〉

ところ 十四世喜多六平太記念能楽堂

【会場案内図】



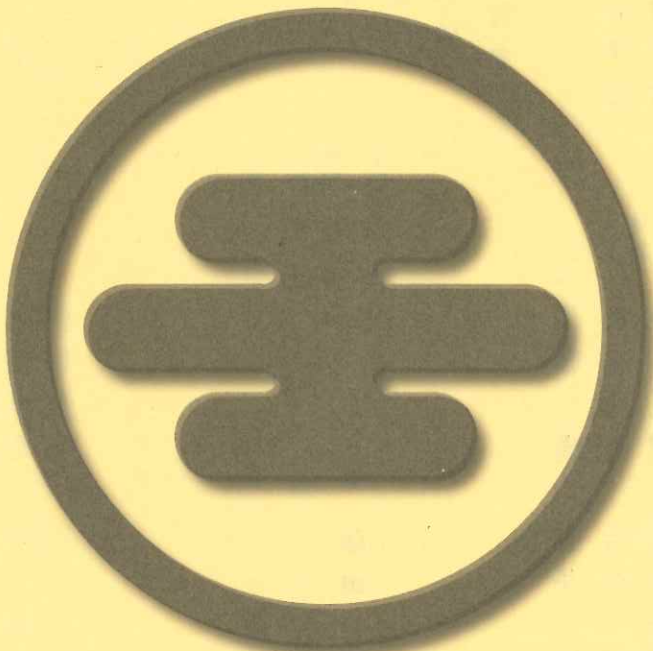
主催 **喜多流職分会**

後援 公益財団法人 十四世六平太記念財団

〒141-0021 東京都品川区上大崎四一六一九

十四世喜多六平太記念能楽堂

電話 (03) 3491-1813  
ファックス (03) 3491-1899



**喜多流職分会**

# 《チケットのご案内》

二月チケット発売開始日

平成二十六年一月五日(日) 午前十時より

## 年間優待券

- 十一枚綴り 五〇、〇〇〇円
- 五枚綴り 二五、〇〇〇円

優待券は各職分でも受付をしております。

## 前売券

- 一般券 六、〇〇〇円
- 学生券 二、五〇〇円
- 学生団体(二〇名以上) 二、〇〇〇円

指定席料 二、五〇〇円

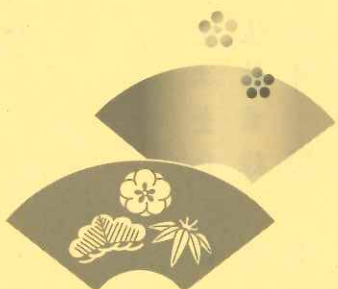
## 当日券

- 一般券 六、〇〇〇円
- 学生券 二、五〇〇円

## 《お取扱い》

窓口とお電話にて承っております。

(FAX及びメールでのお申し込みは  
お受けしておりません。)



十四世喜多六平太記念能楽堂事務局

《電話》〇三―三四九一―八八一三

(午前十時〜午後六時)

## 平成二十六年 三月自主公演能予告

平成二十六年三月二十三日(日) 正午始  
十四世喜多六平太記念能楽堂

「田村」 谷 大作  
「桜川」 友枝昭世  
「須磨源氏」 狩野了一

三月チケット発売開始日  
平成二十六年二月二十三日(日)  
午前十時より

### 【ご注意】

\*喜多流職分会の許可なき写真・ビデオ撮影、及び録音はできません。また演能の妨げや他のお客様の迷惑になる行為もご遠慮ください。時計のアラームや携帯電話の電源は必ずお切りください。なお、迷惑行為を発見した場合や係員の指示に従っていただけない時は退場していただく事もございますのでご了承ください。

\*2階ラウンジ以外でのご飲食は固くお断り致します。

\*自主公演当日は午前10時30分より「整理券」(お一人様一枚)をお配りし、午前11時より整理券番号順に見所へ入場していただきます。

\*チケットは入場前に半券を切り離すと無効になります。

\*座席はお一人様一席です。入場の際手荷物等でお連れ様の座席を取り置く行為は固くお断り致します。

\*公演日によっては、満席になり次第入場をお断りすることもございますので、あしからずご了承ください。

\*公演中止の場合を除き、お申込後のチケットの払い戻し、変更、再発行はいたしません。

\*やむを得ない都合により出演者が変更になる場合がございます。

\*全館禁煙でございます。屋外喫煙所をご利用ください。

\*お客様用駐車場はございません。お車でご来場の方は周辺駐車場をご利用ください。

\*貴重品の管理には十分ご注意ください。館内で起きました盗難・紛失につきましては一切責任を負いかねます。

# 二月自主公演番組

●平成二十六年二月二十三日(日) 正午始  
●整理券配布・十時三十分、見所入場・十二時  
解説・十一時十五分

能

シテツレ・鶴 高林昌司  
シテツレ・亀 高林呻二  
シテ・皇帝 高林白牛口二

## 月宮殿

ワキ・大臣 宝生欣哉  
ワキツレ・従者 高井松男  
ワキツレ・従者 野口琢弘  
アイ・官人 山本凜太郎

大鼓 亀井 実 太鼓 三島元太郎  
小鼓 亀井俊一 笛 一噌仙幸

後見

塩津哲生  
金子匡一

地謡

塩津圭介 谷 大作  
佐藤章雄 大島政允  
松井 彬 香川靖嗣  
友枝雄人 中村邦生

狂言

## 附子

シテ・太郎冠者 山本則孝

アド・主 山本則秀  
アド・次郎冠者 山本泰太郎

休憩 二十分

能

後シテ・和泉式部の霊  
前シテ・里人

粟谷浩之

## 東北

ワキ・僧 則久英志  
ワキツレ・従僧 館田善博  
ワキツレ・従僧 梅村昌功  
アイ・東北院門前の者 山本則重

大鼓 亀井洋佑 笛 藤田貴寛  
小鼓 幸 信吾

後見

粟谷幸雄  
内田安信

地謡

佐藤 陽 笠井 陸  
大島輝久 大村 定  
佐々木多門 粟谷能夫  
佐藤寛泰 内田成信

休憩 十分

仕舞

巴

大島輝久

地謡

佐藤寛泰

佐々木多門

金子敬一郎

友枝真也

能

後シテ・鬼神  
前シテ・野守

長島 茂

# 野守

ワキ・山伏 殿田謙吉

大鼓 柿原光博  
小鼓 森澤勇司  
太鼓 林 雄一郎  
笛 杉 信太郎

アイ・春日の里人 遠藤博義

後見 友枝昭世  
高林伸二

地謡

佐藤 陽 金子敬一郎  
友枝真也 粟谷明生  
粟谷充雄 出雲康雅  
塩津圭介 狩野了一

## 附祝言

### 《月宮殿(げつきゅうでん)》

中国の王宮でのお話。新年の節会に、皇帝は不老門へ出御され、臣民一同より慶祝の拜賀を受ける。宮殿は金銀珠寶に飾られ、蓬萊山も欺くのごとくきらびやかである。毎年の嘉例に従い、鶴は千年、亀は万年の長寿を皇帝に捧げる鶴亀の舞が奏上される。皇帝は自らも月宮殿に於いて舞樂を奏され、その後御輿に乗って長生殿に還御される。鶴と亀は子方が演じることが多いが、今回はシテツレとして大人が演じる。その場合は能面をつける。謡曲の中でもっとも短い曲の一つで、その構成も簡潔であり、節付けも単純であるため初心者も稽古用として選ばれることが多い。

### 《附子(ぶす)》

用事があつて出掛けることになった主人は、二人の召使い、太郎冠者と次郎冠者に留守を言い付ける。その際、「附子」という猛毒があつて、そちらの方から吹く風に当たつただけで死んでしまうので、決して近づかぬよう厳命する。しかし主人の言葉を怪しんだ二人は、決死の覚悟で「附子」に近づいていく。なんとそれは砂糖だった。主人は二人に食べられてしまわぬよう、嘘

をついたのだった。夢中になって「附子」を食べ尽くしてしまつた二人、そしてその言い訳に良いことを思いついたのだった。

### 《東北(とうぼく)》

都へ上つてきた旅僧が、東北院を訪れ梅の花を眺めていると、美しい若い里女が現れて、この寺はもと中宮上東門院の御所で、そのころに仕えていた和泉式部が植えたのがこの梅であり「軒端の梅」という。そして実は自分がこの花の主であると告げて消え去る。(中入)旅僧は、夜もすがら軒端の梅の蔭にいて読経をしていると、生前の姿の和泉式部の霊が現れ、昔、関白藤原道長が読経しながら門前を通られた声を聞いて、「門の外 法の車の音聞けば 我も火宅を出でぬべきかな」と詠んだことが思い出されると旅僧に語る。そして式部はなお和歌の功德で歌舞の菩薩となつたと語り、昔を思い出して舞を舞い、やがて方丈のうちに姿を消すのだった。

### 《野守(のもり)》

出羽国の羽黒山の山伏が、奈良の春日野に来ると由緒ありげな池がある。すると一人の野守の老人がやって来る。

(終了予定四時半過頃)

山伏はこの池について尋ねた。老人は「野守の鏡」という名の池だと言う。それは野守が鏡の代わりにするからそう呼ばれているのだが、本当の「野守の鏡」というものがあり、昔、昼は人であるが、夜は鬼となつてこの野を守つていた鬼神の持ち物だという。山伏は「はしたかの野守の鏡得てしかな」思ひ思はずよそながら見む」という古今集の歌について、老人に尋ねた。するとそれも「野守の鏡」はこの池のことであり、昔、雄略天皇が春日野に狩をされたとき、鷹が飛び立ったまま戻つて来なかつたので、野守(禁獵の野を守るもの野の番人)に尋ねたところ、野守は「おん鷹は この水の底に侍る」と言つたので、そのわけを尋ねると、前にある水を指してここに映っていると聞いた。そこでその池を「野守の鏡」と呼ぶようになったと語り、山伏は本当の「野守の鏡」が見たいというが、老人は恐ろしい物なので水鏡を見るだけにしようと言つて塚の中に姿を消すのであった。(中入)夜になり一心に祈る山伏の前に塚の中から鬼神が鏡を持って現れ、天上界から地獄の底までを映し出す不思議な鏡を山伏に与え、大地を踏み破つて去つて行く。